

今も孤立 日本語未習得

つなぐ
神奈川と共生

外国ルーツの子どもたち ①

3月下旬、NPO法人「外国人教育生活相談センター」・信愛塾（横浜市南区）で、学校とは別の「もう一つの卒業式」が開かれた。

参加したのは、スタッフらから日本語や宿題の勉強を教わる外国ルーツの子どもたち。保護者も参加し、歌を歌ったり、ご飯を食べたりしてそれぞれの進級や卒業を祝った。

「信愛塾にきたこと、学んだことを思い出し、勇気を出して一歩を踏み出して」。センター長の竹川真理子さんが語りかけると、子どもたちは特製の「卒業証書」をうれしそうに受け

取った。信愛塾の活動は1978年に始まり、2004年にNPO法人化した。住宅街の一角にあり、寄付金で運営されている。学校の放課後を中心に、竹川さんら職員4人とボランティアが、子どもの宿題や日本語学習をサポートしている。学校の宿題や教科書などを使って日本語を教え、家に食べるものがない子にはご飯を食べさせるほか、家庭へのアプローチなど総合的な支援に取り組む。

26年3月のこと。進級や卒業で不安定になる子どもが増える時期に、竹川さん

来日後8カ月 小学校通えず

は「心配な子がいる」とス タッフに向けて神妙な面持ちで話し始めた。

家族が制度面の情報にアクセスできず「学校には通えない」と思い込んでいたためか、就学の手続きがなされなかった。8カ月間も自宅で過ごしていたという。

横浜市内の小学校に通い始め、信愛塾に来るようになったが、最近はその姿を見なくなっていた。

中学では、校内で日本語を学べる「国際教室」も欠席し、教員が対応に困っていた。竹川さんに相談してきたのだという。学校側は、少年を「日本語の習得が進まず、対応が難しい子ども」と捉

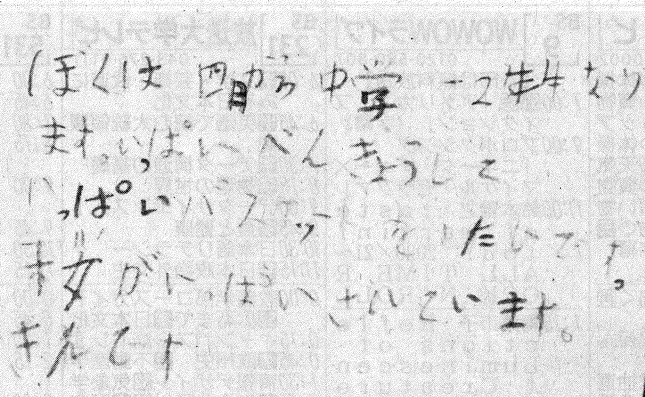
えているようだった。しかし、竹川さんの受け止め方は少し違った。これまで少年と接した経験から、本人の問題よりも、環境の影響が大きいと感じていたので。

フィリピン人の母親は幼いきょうだいの世話につきつきり。父親は仕事に精いつばいな様子だった。家計は厳しく、少年はいつも学校指定の半スポンの体操服姿で、親との会話はほとんどない様子だった。学校に友達もいなかった。

「あいうえお、一人であつたんだ。かつて少年は、竹川さんから来日後にどう過ごしていたかを聞かれそう答えたという。『偉かったね。もっと勉強したい?』と尋ねると、『うん』と応じていた。

そんなエピソードを思い出しながら、竹川さんは学校と連携を図り、少年に信愛塾に再び来るように伝えた。

すると、少年は久しぶりに信愛塾に姿を見せた。大歓迎を受け、照れながらも次々とボランティアのスタッフたちとハグを交わした。



少年が支援者に宛てた手紙。来日後の約8カ月間、小学校に通う手続きがなされず、中学2年になる今も苦勞しながら日本語の習得に励んでいる。信愛塾に通う外国ルーツの子どもの「卒業を祝う会」の様子。右は竹川真理子センター長。いずれも横浜市で、横見知佳撮影



急増する日本で暮らす外国ルーツの人々。その中には、壁に直面しながら日々を生きている子どもたちがいる。横浜の支援現場から見える姿を取材した。

事務局長の王遠偉さん（30）が準備したおにぎりをほおばると、「読んでみる」と国語の教科書を手に取り、詩「ふきのとう」を一字一字確かめるように音読した。読めなかった漢字は何度も口に出して、なんとか最後まで読み切った。

帰国の際、竹川さんから「また来週も来るんだよ。食べられるものもあるからね」と伝えられると、「わかった」と言い、にっこりと笑った。少年は今、中学2年生になった。信愛塾では漢字の勉強に一層力を入れている。

竹川さんらは、家庭にも米などの食料支援をするほか、母親に幼いきょうだいを保育園に通わせて生活にゆとりを設けるよう勧めている。落ち着いて子育てできる環境になり、少年が健やかに過ごせるようお願いしながら、支援を続けている。

◇ ◇